

沢村栄治も川上哲治もプレーした洲崎球場

プロ野球はここから始まった

巨人・阪神の伝統の一戦、沢村栄治のノーヒットノーランなど、プロ野球史を彩る数々の名場面を生んだ場所。だが、その多くは謎に包まれたまま——それが洲崎球場だ(※)。球場の光茫を本にまとめた森田創さんに聞いた。

東京急行電鉄株式会社／作家

森田 創

●もりた・そう 1974年神奈川県生まれ。東京大学教養学部人文地理学科卒業後、東急電鉄に入社。著書『洲崎球場のボール際 プロ野球の「聖地」に輝いた一瞬の光』(講談社)で第25回ミズノスポーツライター賞最優秀賞を受賞。

青春を野球に捧げて

——『洲崎球場のボール際』を読むと、プロ野球の歴史はここから始まったと言っても過言ではありません。そもそもなぜ洲崎球場に注目されたのでしょうか？

昔から野球が好きで、中学校のときは野球しかやっていませんでした。

読む本も全部野球で、その中の一つ、川上哲治さんの打球を弾丸ライナーと名づけた、都新聞(現・東京新聞)のスポーツ記者・大和球士さんが書いた『プロ野球三国志』(ベースボール・マガジン社)に洲崎球場が出てきました。神話の舞台のように、ここからプロ野球は始まったと書かれています。巨人と阪神の激突も、沢村栄治と景浦將の戦いも、プロ野

球の人氣も、ここでの名勝負がすべて起点だといった話がたくさん出てきたんですね。

もともと考古学も好きで、ローマ神殿のようにいまは完全になくなってしまった、そこは伝説の地だったのだということに、畏敬の念も抱いていましたから、洲崎球場の存在に心が引かれたのだと思います。

東急電鉄に入社してから、東急文

化村に Outreach してミュージカル劇場

「東急シアターオーブ」の立ち上げに携わり、三年ほど休みなく働いてひと段落したときにグアム旅行に行つたんです。その帰りの飛行機の中で読んだ佐野真一さんの小説『巨怪伝』(文春文庫)にも洲崎球場の話が出てきた。しかし、どこにあったのか、どのくらい大きかったのか、いつなくなったのか……あらゆることが謎だと書いてあった。プロ野球の伝説がここから始まっているのに、何の記録も残っていない球場だと知って、調べてみたいと強く思うようになったんです。ちょうど仕事以外のことをやりたい時期でもありません。たし、洲崎球場の名は子供のころから知っていたというの背中を押しましたね。

——昼間は仕事をして、休日などを使って調べたのですか？

ちょうど調べ始めたところに、劇場から本社に戻されてしまったんです。一から劇場を作って、やっと開いて、さあこれからだというときに本社に戻されてしまい、自分の居場所がないように感じていた。そんな自分自身と、華々しい歴史を作りながらも忘れられてしまった洲崎球場が勝手にシンクロして、調べようという欲求に拍車がかかったように思います。まあ、完全に被害妄想なんですけど(笑)。

——仕事以外のことに打ち込むことで、精神のバランスをとるといふか。そんな感じはありましたね。広報課長をやっていたんですが、かつて自分がのめり込んだ演劇の仕事との落差に悩みました。演劇の仕事はつらい思いをすることも多いのですが、反面、初日の幕が開いて観客のスタンディングオベーションを目にする

快感は、普通のサラリーマン生活では味わえるものではない。それを喪失してしまった。立ち直るのに半年以上かかりました。でも済んだことはしょうがないので、違うことに自分のエネルギーを注ごうと、よけい洲崎球場に夢中になったような気がします。

くだらない人間だと思われるので気が引けますが……最初は、ある種の復讐みたいな思いがあったんです。「本社なんかに戻しやがって、じゃあいいよ、仕事は普通にやって、自己実現は別のことで図るよ」という気持ち(笑)。

調べていくうちに、ここで青春を野球に捧げて亡くなっていった人がたくさんいることを知ったんです。そんな話を周囲の知り合いにしているうちに、「そんなに調べているなら本にしてみたら？」と言われて。

※日本で2番目のプロ野球専用球場として、現在の東西線・東陽町駅(東京都江東区)近くに誕生した。プロ野球が開催されたのは1936年11月から38年6月まで。